

身近な情報を実践活動に生かす特別活動

～5年 目標の定義付けと課題解決のサイクルを意識した実践を通して～

名古屋市H小学校

1 研究のねらい

私は、集団目標を達成するために、自分たちで手段を考え、実践する児童を育てたい。これは、みんなで立てた目標を意識し、目標を達成するための手段を、話し合いの中でまとめ、実践していく児童の姿である。児童は将来、社会に出たときに、様々な集団の一員として、他者と協力しながら日々目標に臨んでいくことになる。その際の基礎を築いていくことで自主的・実践的な態度を育てることにつながると思った。統計的手法を効果的に用いて、集団目標を達成するために、自分たちで手段を考え、実践する児童を育てていきたい。本学級の児童は、話し合いの際に、すぐに結論を出してしまう傾向がある。スピード感をもって物事に取り組む姿勢はよいが、その結論の正当性や集団全体の納得感に関しては、疑問が残る。そのため、学級目標を設定する際に、その定義付けや達成したときの姿を十分に児童が検討し、1年を通してこの目標の達成に向け、児童が試行錯誤をしながら実践していく環境を整えていこうと決意した。そのため、次の2点に重点を置き、実践に取り組むことにした。

- ・学級アンケートを通じて、自分たちの実践の効果を検証できるようにすること
- ・話し合いの際に、集団として合意形成できるように取り組むこと

2 研究の内容（対象：5年生 23人 男子13人 女子10人）

（1）基本的な考え ○定義付けと課題解決のサイクル

集団の納得感を高めつつ、目標を達成するために試行錯誤する力を育みたい。その目標に位置付ける最も大きな学級の根幹を学級目標にした。普段、学級内でなかなか意見が通らない児童の考えも極力反映して全体の納得感を高められるよう、ワードクラウドを使い、全体の考えを可視化するなどの工夫を行った。そして、本学級の学級目標は「笑顔豊かに個性を認めようハッピースマイル5年1組」に決定した。ここで決定した学級目標に対して、次は「どの【使用したワードクラウド】のような状態になったら学級目標が達成されたのか」という定義付けの話し合いを行った。「ミスしたときに責めない」「自分のよさが認められる」などの具体的な姿が話し合いの中で表れてきた。そのような理想の状態を八つに定め、「信頼」「安心」「協力」「認め合い」という4項目にカテゴリ分けした。この4項目が達成された状態が学級目標を達成した状態であるという共通認識が生まれた。この具体的な姿を目指せるように、それらを学級アンケートの質問項目とした。この学級アンケートを使用することで、児童は常に、学級目標とその具体的な姿を意識することができる。「課題を把握⇒解決案の話し合い⇒実行」のサイクルを意識して学級での実践を行っていく。

学級目標	・ミスしたときに責めない	信頼
	・誰とでも言い合える	
	・居心地よく過ごせる	安心
	・みんなの前で失敗できる	
	・助けを求めることができる	協力
	・誰とでも楽しく優しく	
	・友達を否定しない	認め合い
	・自分のよさが認められる	

【学級目標が達成された状態の共通認識】

5年生 学級アンケート

① クラスの中で自分がミスや失敗をすると、他の友達から非難されたり、強く指摘されたりすると思いますか？

② クラスのどの友達にも、何でも言い合えると思いますか？

【信頼の項目】

① クラスの中で自分がミスや失敗をすると、他の友達から非難されたり、強く指摘されたりすると思いますか？

② クラスのどの友達にも、何でも言い合えると思いますか？

【共通認識から作成した「学級アンケート」と一部抜粋】

(2) 実践の流れ

流れ	活動の場	活動内容
とらえる	学級活動	ケーススタディで自分たちの課題を意識する
あつめる	朝の会	学級アンケートを実施し、学級の情報を収集する
まとめる	休み時間	前後の変化が分かりやすくなるようにグラフをまとめる
よみとる	学級活動	グラフを読み取り、課題に対する解決策を話し合う
生かす	朝の会・帰りの会	読み取った課題を意識して、2学期の方向性を定め、実践する

(3) 実践の内容

ア 題材名 学級目標を達成するための「学級アンケート」を基に、学級での活動を考えよう

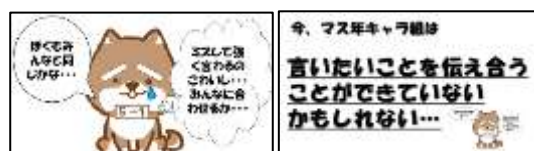
イ 目 標 定期的に実施する学級アンケートの結果を基に、課題を捉え、その解決策を話し合いから考える。決まった解決策を実践に実践していき、目指す姿へと迫っていきけるようにする。

ウ 統計教育上の指導目標 学級アンケートの結果から、自分たちの強みや課題を考え、学級全体でどのような活動を行っていけばよいかの判断材料にすることができるようにする。

エ 活動の実際

【とらえる】…学級活動「ケーススタディで自分たちの課題を意識する」

学級目標とその目標を達成した姿を共通理解し、さらに、アンケート事項も決定したことで、学級は好発進したかに見えた。5月に第1回の学級アンケートを実施し、その結果を児童に提示した。しかし、その結果から自分たちの課題として捉えきれていないように感じた。そこで、架空の学級のケーススタディという形で課題の具体例を提示し、客観視できるように工夫した。架空の学級では、第1回の学級アンケートで課題と考えられるシーンをスライドで児童に提示し、その課題の解決策を話し合った。児童は客観的な視点で話し合うことができていた。授業のまとめで再度第1回の学級アンケートの結果を児童に提示すると、「言いたいことが言い合えていないっていうこの組の課題って僕たちのクラスの課題と同じだ！」

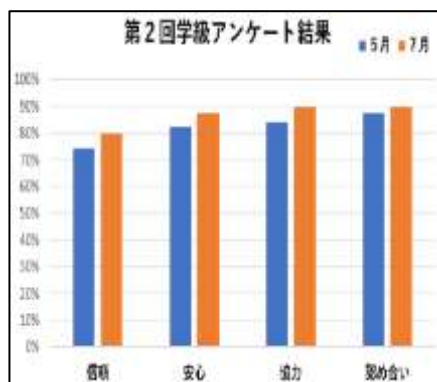


【ケーススタディの際に使用したスライドの一部】

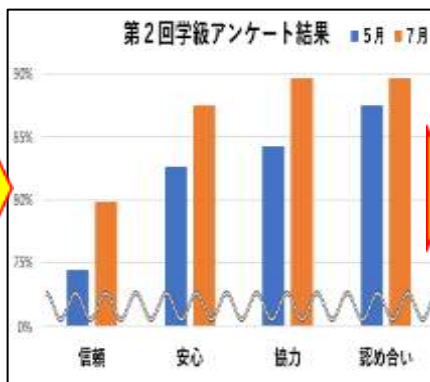
「今の話し合いで考えた解決策ってそのままこのクラスで使えるかも」などの意見が出てきた。

【あつめる】…朝の会「学級アンケートを実施し、学級の情報を収集する」

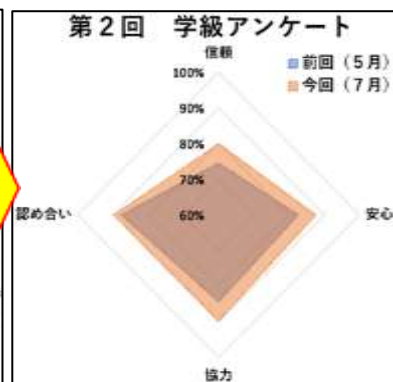
1学期の最終日。朝の会で、第2回の学級アンケートを実施し、学級の目標に対する項目について、個々の達成度を集計した。その結果を棒グラフにして前後の比較ができるようにした（図1）。ケーススタディを通して、自分たちで捉えた課題を意識しながら過ごしてきた結果が集約された。



【図1 第2回学級アンケート結果】



【図2 波線を使ったグラフ】



【図3 レーダーチャートにしたグラフ】

【まとめる】…休み時間「前後の変化が分かりやすくなるようにグラフをまとめる」

9月になり、図1の学級アンケートの結果を児童に提示した。しかし、変化が分かりづらく、意見の発展があまりなかった。一部の児童から「もっと分かりやすくしたい」という意見があった。そこで、棒グラフに波線を使って数値を省略するというアイデアから、図2のようなグラフになった。それぞれの変化が見やすいと児童には好評だったが、「もっと全体の変化が見たい」という意見から、数値を省略したレーダーチャートの形式にまとめたものが図3である。

【よみとる】…学級活動「グラフを読み取り、課題に対する解決策を話合う」

グラフの変化が分かりやすくなったことで議論が活発になった。まとめたグラフから、学級の課題に対する2学期の方針について、児童は大きく分けて三つの考え方に分かれていた。以下が主な考え（○）と児童の主な主張（□内）である。

○信頼の項目をもっと伸ばしたい

最も向上した項目だが、いまだに最も低い。全ての項目が向上しており、信頼に絞った方針を立てることは、他の項目を落とすことにはつながらない。方針を一つに絞ることは、普段から意識しやすい分、取り組みやすい。信頼の項目が100%になったら、すぐに他の項目への取り組みを考えればよい。

○全部の項目を100%にしたい

全ての項目が100%の状態になれば、学級目標が達成され、みんなが満足して過ごしている状態だと思う。ならば、3学期を待たずに2学期で達成した方がよい。全部100%になったときに、また新たな課題が出たら、そのときに新たな項目を作るなど考えればよい。

○アンケートに新たな項目を作りたい

現状では全ての項目がほぼ達成されていると思う。100%になることは現実的にありえない。現状では全ての項目が達成されているのに、学級目標が達成されていると感じない。なので、学級目標達成のための別の項目が必要である。

このように異なる考えをもとに、2学期の方針を決めるために、次のような話し合いを行った。

C1：数値の高い低いも大事だが、それだけが方針を決める理由ではいけないと思います。

C2：考え方の違いがあっても、選ぶ理由が大事だと思います。

T：そうだね。どんな理由が考えられるかな？

C3：全てを100%にするのも、信頼を100%にしてから他を上げていくのも順番の違いのみで同じことだと思います。

C4：それならば、一つに集中して取り組んだ方がいいかもしれない。

C5：五つ目の項目は全て達成してから作ったほうがいいのかも。

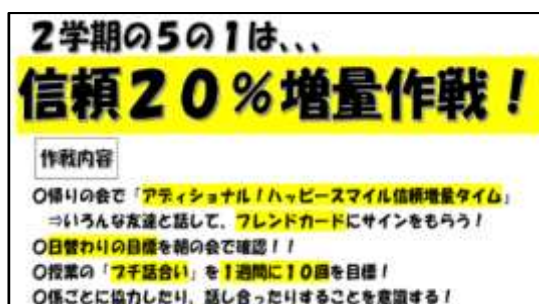
T：では、2学期のクラスの方針はどうしましょうか。

C6：「信頼」の項目に集中的に取り組むのがいいと思います。

グラフの変化量に注目できるようになったのは有意義であった。数値の高低だけに着目せず、内容や理由で方針を決定すべきという建設的な意見が多く出た。考え方の違いはあっても、最終的な目的が同じことに気付いた児童は、円満な話し合いをへて、2学期においては、「信頼」の項目を重点的に取り組む決定をした。

【生かす】…朝の会・帰りの会「読み取った課題を意識して、2学期の方向性を定め、実践する」

2学期の学級方針を「信頼 20%増量作戦」と決定した。クラス全体で「信頼」の項目を100%に向上させるための具体的なアイデアが出されていった。信頼を向上させるためには、「友達と話す機会を増やすことが重要だ」と考えた児童は、その方針に沿った活動を考え出していった。右のポスターが話合いでまとまった具体的な取り組みの一覧である。児童主体で取り組みは意欲的に実施され、帰りの会では、毎日違う友達とテーマに沿って1分間話をする時間が設けられた。「まだ〇〇さんと話してないから話そう！」「明日は僕と話そうね」など誰とでも分け隔てなく交流できる児童たちの姿が見られるようになった。

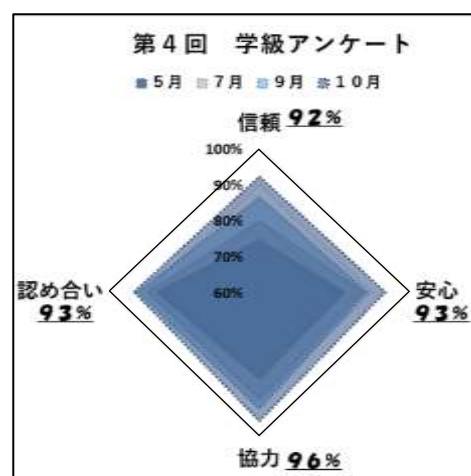


【信頼20%増量作戦のポスター】

(4) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

右の図4は、9月・10月に取ったアンケートの結果を表したグラフである。4項目全てが向上し、特に児童が主体的に取り組んだ「信頼」の項目でも大きな変化が見られた。このような実態から、本実践の成果と課題を次のように捉えた。

- グラフの見え方を「数値」から「変化量」に着目できるように変形したことで、現状の実態を児童が把握しやすくなった。
- 課題を把握し、解決策を話し合い、実行するというサイクルが学級に定着し、様々な場面で児童の主体的な活動が見られるようになった。



【図4】

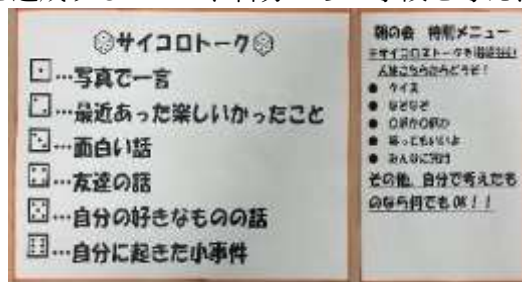
- 「課題を把握⇒解決案の話合い⇒実行」というサイクルは効果的であるが、1サイクルを終えるのに時間が掛かりすぎてしまった。

3 研究のまとめ

今回の実践を通して、統計的手法を用いることは、児童に課題を捉えやすくし、話し合いを深めるのに有効であることが分かった。現在も児童が中心となって、「信頼 20%増量作戦」は進められている。また、「朝から学校がもっと楽しくなるようにしたい」という児童の意見から、日直が朝の会でサイコロトークを進行するなど、児童が主体となって活動を考える姿が見られるようになった。この活動では、サイコロを振ってランダムにトークテーマが変わる。しかし、ランダムにトークテーマが決まるやり方が苦手だという友達の存在も考慮して、サイコロを振る以外の選択肢も用意した。そこには、学級目標にある「個性を認めよう」が反映されていた。学級目標を達成するために、自分たちで手段を考え、実践する児童の姿がそこにはあった。今後も統計的手法を有効に用いて、課題解決に主体的に取り組む児童を育てていきたい。



【「サイコロトーク」の様子】



【苦手な子用の特別メニュー】